

みんなで
考えよう
同和問題
No. 219

このコーナーでは、隔月のシリーズで掲載
しています。これを手がかりに、家庭で人権・
同和問題について話し合ってみましょう。

らい予防法廃止から20年に思う

ハンセン病患者を苦しめてきた『らい予防法』が平成8年に廃止され、今年は20年の節目にあたります。かつて、ハンセン病は『らい病』と呼ばれ、さまざまな法律によって患者を強制的に隔離する政策が約90年間も続けられました。

この政策に異を唱えた小笠原登(のぼる)という医師を知っていますか。彼は、昭和6年に『癩(らい)に関する三つの迷信』という論文を発表しています。当時、らい病は「遺伝する病気だ」、

10月9日、南波多町府招の愛宕権現神社で秋まつりがあり、『府招の浮立』が奉納されました。府招の浮立は、昭和43年に県重要無形民俗文化財に指定され、昭和62年に記録措置を講ずべき無形民俗文化財として選択されています。

愛宕権現神社秋まつり『府招の浮立』 多彩な演目を披露し参観者を魅了

浮立の形態は、府招上公民館から神社までの『道行き』と、神社広場や籠堂で行う『本浮立』で構成。本浮立では全33演目のうち、平成14年以來の披露となる『鈴振り』など15の演目が披露され、多彩な動きで参観者を魅了しました。



↑ 14年ぶりに披露された演目『鈴振り』

「強烈な伝染病だ」、「不治の病だ」と信じられていました。しかし、その思い込みは迷信であり、患者やその家族を理不尽に苦しめているとして、

国の隔離政策を強く批判しました。医師として何百人もの患者を治療した経験から、「ハンセン病は必ず治る病気である」と確信していたのです。

しかし、昭和16年の日本らい学会総会において、小笠原医師は厳しい非難にさらされ、彼の学説は葬り去られます。

患者すべての隔離が国策である以上、それに反対するいかなる学説も許されない時代でした。約70年前にはハンセン病の特効薬が開発され治療方法が確立されていたのですが、それにもかかわらず、世界の潮流と逆行するように国は隔離政策を続けました。この政策が打ち切られたのは、ほんの20年前のことなのです。

もし、小笠原医師の学説が当時の医学界に受け入れられ、早い段階で正しい行動ができていたらと思うと残念でなりません。21世紀は、『人権の世紀』です。同様の悲劇を二度と繰り返さないよう、小笠原医師の真理を探究する英知と、信念を貫く真摯な姿勢に学びたいものです。

郷土の文化財

腰岳と黒曜石シリーズ⑧

問合先 生涯学習課文化財係

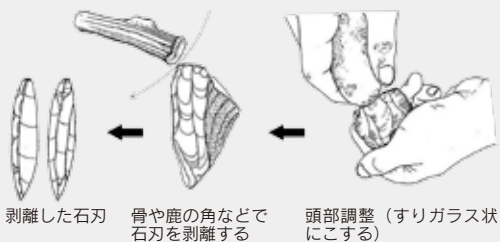
(☎) 23186

腰岳を見直す・鈴桶型刃器技法

このシリーズの4回目です。説明した『鈴桶型刃器技法』(以下鈴桶技法)について、もう少し説明します。

鈴桶技法は、二里町の字鈴桶にある鈴桶遺跡で初めて確認された石器製作技法であることから、この名前が付けられました。考古学界では遺跡とともに、大変有名な技法です。

【鈴桶型刃器技法】



引用文献 文化としての石器づくり 学生社 Stone Sources No.1 石器産地研究会

石器は、黒曜石などの原石を打ち割って作ります。ナイフや石の矢じりなどを作するためには、まずその素材となる『石刃』を原石から作り出し、この石刃をさらに加工して石器の形に整えます。鈴桶技法は、この石刃を効率よく、大量に作り出すことができる特別な技術です。石刃を作り出すためには、打ち割る箇所を調整が非常に重要となりますが、鈴桶技法では、すりガラス状にこするなどの特徴があります。

日本の石器製作技術を調べるためには、東アジア全体の石器製作技術と比較検討する必要があります。鈴桶技法がどこから伝わってきたのかはまだよくわかっていないため、今後の調査に期待されます。